



# 2019 フィールド Vol.2 スタディ カタログ

2018年度Ⅱ期（春休み）に実施したフィールドスタディを  
収録しています。



法 政 大 学  
人 間 環 境 学 部



# 「食と命と平和」

## ～自給自足の有機農業を学びながら国際交流～

担当教員 高橋五月 板橋美也

### コース概要

日程 2019年3月4日～3月7日

場所 栃木県那須塩原市

参加人数 15名

### コースのねらい

那須塩原にあるキリスト教系の農村指導者養成専門学校・アジア学院は、自給自足の有機農業・畜産を行い、途上国の農村指導者の育成に力を注いできた学校です。このアジア学院で、様々な国の人々と、基本的に英語を用いながら農作業をしたりレクチャーを受けたりすることで、英語でのコミュニケーション能力を磨くと同時に持続的開発、食・命・平和についての考えを深めることを目指しました。

### 内容

事前学習では、グループに分かれて FS 実施期間中にアジア学院にて各自調査したいリサーチトピックを決めた上で、FSに臨みました。3泊4日にわたる FS では、アジア学院内のセミナーハウスと呼ばれる宿泊施設に泊まりました。基本的には、毎朝起きたらまずラジオ体操とフードライフワーク（畑での農作業、家畜の世話、朝食の準備など）を行った後、朝食をいただき、礼拝堂での朝の集いでアジア学院の方のお話を聞きました。これらは全て、アジア学院に所属する様々な国の方々と一緒に行いました。その後、ファームワークまたはレクチャー・ディスカッションなどを通して、アジア学院の理念を学び、食と命と平和のつながりについての考えを深める4日間となりました。

レクチャー・ディスカッションのテーマは日によって異なり、1日目は「共に生きるために」というテーマでした。この理念を体現する場所として日本の古民家を改築した礼拝堂を訪れ、様々な文化的・宗教的背景を持つ人々がアジア学院でどのように対等な関係を結びながら共に学ぶことを目指しているか、お話を伺いました。

2日目のテーマは「フードライフ」です。この聞きなれない言葉はアジア学院が大切にしている食と命のつながりを表現するもので、私たちが日々食べているものが他の命をいただくことで成り立っていること、そうすることで私たちの命が活かされていることを、豚舎を訪れたりお話を伺ったりする中で改めて考えさせられるものとなりました。

3日目のテーマである「サーバントリーダーシップ」もアジア学院が大切にしているモットーで、リーダーは人の上に立つのではなく、人に



写真1 「サーバント・リーダーシップ」の理念を体現する、説教台が一番低い位置に設計された礼拝堂でお話を聞きました。



写真2 朝のフードライフワークで豚の世話。

仕えるものである、という理念を表しています。この理念について理解するため、「リーダーに必要な資質とは何か」について皆でディスカッションをした上で、アジア学院のスタッフの方からお話を伺い、さらに「サーバントリーダーシップ」の理念をどのように途上国の持続的開発に活かせるかを、コンゴ出身の牧師の方のお話を伺いました。レクチャー後も、「開発とは何か？」についてグループディスカッションや全体での意見交換を通して批判的に考えました。

最終日のテーマは「コミュニティ」です。この最終日までには、毎晩多くの学生が参加した近くの温泉での入浴・バーベキューなどを通して参加学生同士だけでなくアジア学院のスタッフの方々とも打ち解けることができ、一つのコミュニティが出来上がっているようでした。最初はディスカッションに慣れなかった学生たちも、最終日には熱心にディスカッションに取り組み、4日間を通して学んだことを総括しました。

FS 終了後、あらかじめ設定していたリサーチトピックについて各々が FS を通して考察したことをレポートにまとめ、事後授業ではそのレポートの成果を踏まえて再びディスカッションを行い、話し合った内容を英語で発表してもらいました。

アジア学院は、様々な国の方々と英語でコミュニケーションをとり、共同作業を行う場所であるため、日本でありながら様々な異文化や価値観に触れられる、いわば疑似留学体験をできる場所でもあります。参加要件として英語力は問いませんが、最初は慣れない英語に戸惑っていた学生も、FS 中は一生懸命英語で自分の考えを伝えようと頑張っていました。このように、本 FS は、日本にしながら英語でのコミュニケーション能力を磨き、さらにほぼ自給自足を実現しているコミュニティの中に身を置くことで、普段の生活の中ではなかなか気に留めることのない食と命について改めて考えるきっかけを与えてくれる、貴重な経験となりました。また、途上国の開発に関心をもつ学生にとって、アジア学院の掲げる理念は、新たな視点を提供してくれるものとなりました。

## 学習を終えて

### ○参加学生より（1年 池末奈央）

私にとって那須の FS はとても有意義なものになりました。

私たちは常日頃から数えきれないほどのいのちを頂いて生きています。実際に豚の餌を作り与えるという過程を経験することや、生後間もない豚の赤ちゃんを見て生命の大切さや尊さを感じました。また、実習先では食前にお祈りをし自らが食事を摂ること、今自分が生きていることに感謝します。日々の当たり前を口に出すことにより当たり前の大切さに気づかされました。

今回の FS で如何に私たちが恵まれた環境の中で生きているかわかりました。そして、多くの人が食事や生命を大切にできる未来はどのようにして創り出すべきか考える契機となりました。

### ○受け入れ先より（アジア学院 山下崇さん）

豚の世話やスパイスから作るインドカレー、アフリカ人の独特のアクセントの英語など慣れない環境の中それぞれにチャレンジがあり、参加した学生たちはそこから多くのことを感じ取ってくれました。命の大切さ、英語を学ぶモチベーション、開発に対する考え方 etc...

個人的には毎日行った温泉と、サーバントリーダーシップの講義での学生のクリティカルな質問が忘れられない思い出となりました。ぜひまた、迎え入れることができればうれしいです。



写真3 フェームワークで畑に肥料をまきました。



写真4 学院内で生産した野菜・卵・肉などで作られた食事。料理も国際色豊かでした。



写真5 「リーダーに必要な資質とは何か？」について、グループごとに模造紙にまとめて発表しました。



# 「地域における就労継続支援・生活介護活動への参加 ―障害者とともに同じときを過ごす―」

担当教員 國則守生

## コース概要

日程 2019年2月1日～25日の4日間

場所 埼玉県三郷市半田および新和

参加人数 10名

## コースのねらい

このフィールドスタディは、知的障害者などの障害者が行う作業や活動に学生が参加し、ともに活動することによって、地域での障害者福祉活動を理解し、学生自身が地域のなかで何ができるのか、何をすべきなのかなどについてフィールドの現場で考え実感してもらうことを目的としています。

## 内容

フィールドの現場は埼玉県三郷市の社会福祉法人・緑の風福祉会で、参加学生は障害者が行う内職活動（プラスチック部品選別など）、創作活動（さをり織）、資源回収、ポスティング、散歩、パン・クッキー製造、パン販売（病院などの地域を訪問し販売すること）など、緑の風福祉会が実施している活動全般に参加し、就労支援や生活介護などの活動を行いました。多くの参加学生は障害者と活動をともにするのが初めてでしたが、4日間の実習を通じて、各自がどのようなことができるのか、地域社会としてどのような課題などがあるのかなどについてそれぞれが現場で考え、気づくことが期待されました。

このために、各学生は施設での諸活動に参加した後、その内容を所定のフィールド・スタディ・ノートに記載し、施設の方のコメントや助言を得る形で1日毎の活動を終えました。現場での活動の後、各人



1日を終えてフィールド・ノートへの記入風景1



1日を終えてフィールド・ノートへの記入風景2

のフィールド・スタディ・ノートの一部の内容とフィールドスタディの一環として課された追加課題をもとに全員でフィールドスタディ報告書を作成しました。

以上のようなフィールドスタディへの参加を通じて、ノーマライゼーション (normalization)、社会的包摂 (social inclusion) など、障害者の生活環境をめぐる議論にも目を向けるきっかけとなることを目指しました。



## 学習を終えて

4 日間の実習記録を記載したフィールド・スタディ・ノートを作成（各日には所属した施設側職員のコメントあり）したほか、①人間環境学部生として参加する目的、②参加前後のそれぞれの感想・気づき、③各参加者が介護・福祉関係（障害者関係を含む）の範囲の書籍のなかで選択した 1 冊についての読書感想、という 3 つのパートからなるフィールドスタディ報告書を作成しました。以下は、そのうちの感想・気づきのなかの振り返りの一部です。

### Bakery & Café 施設のマンマミーアの前で

今回障害者施設を 4 日間訪問して感じたのは、私たちは勝手に障害者の人たちに対して一方的に壁を作っていたのではないかということです。私は今回訪問するまで、障害者の方たちは何もせずそれを衣食住サポートするものだと思っていました。しかし障害者の方たちは自分たちの意志で物事を進め、活動をしていました。同じ立場であるはずの我々なのに、勝手に線引きをしていました。とても失礼なことだと思います。私は改めて障害者の方たちと何も隔たりがなく、みんなが過ごしやすい環境を作れるようになにか活動をしていけるようにしたいです。（3 年 鈴木駿平）

今回の実習で本当に多くのことを学ばせてもらいました。最初は、障害者支援とはどういうことをやっているのかを知りたくてこのフィールドスタディに参加しました。しかし、この 4 日間で障害者支援の実態はもちろんですが、それ以外にも障害者の方のことや職員の方の接し方など、初めて知ることがとてもありました。特に私がフィールドスタディに参加する前と後で認識が変わったのが、障害者の方のイメージです。今まで接したことのある障害者の方は年が近かったり、車椅子で生活している方であったり、色々と手助けを必要とする方がほとんどでした。そういう方々でもとても親しみやすく、親近感が湧きましたが、今回接した方々はほとんどの方が年上で、さらに内職や仕事をしている方々です。同じ障害者というくくりで勝手に認識していましたが、実際は施設の中でも障害は人それぞれで、できることも人それぞれでした。そのことにまず驚くと共に、職員の方々も全て手助けするのではなく、できることはほとんどを利用者さん自身にやらせるという姿勢にも驚きました。（2 年 堀田雪菜）

# 「石垣島・白保のサンゴ礁文化継承活動を学ぶ」

担当教員 梶 裕史

## コース概要

日程 2019年3月7日～3月11日

場所 沖縄県石垣島白保集落

参加人数 16名

## コースのねらい

「サンゴ礁文化」とは何か、それを継承する意義を学ぶとともに、住民主体で持続的な地域づくりにとり組んでいる白保集落で開始された、手づくりの「スタディツアー」に参加して実感的に体験学習します。

## 内容

日本最南の沖縄県八重山諸島・石垣島にある白保集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面して、自然の恵みを持続的に暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化を築いてきた農村です。この白保は、海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の苦難を乗り越え、21世紀から、外部自然保護団体 WWF が設立した組織「しらほサンゴ村」と住民有志との協働により、サンゴ礁文化の継承による持続的な地域づくりを始めました。その活動は現在第二段階に入り、NPO 夏花という新たな住民組織に受け継がれています。この NPO が収入源の一つとして始めたのが、地域のとりくみを体験実習するプログラムを豊かに含む「スタディツアー」です。今回はあいにく天候にあまり恵まれず、赤土流出防止グリーンベルト作りなど、中止となったプログラムもありましたが、毎年のつきあいの積み重ねの成果で、代替プログラムも工夫して下さり、恒例の夕食交流会も含めて、「人」が地域の一番の財産であり、「人との交流」が最大の魅力であると実感する5日間になりました。



名物オバアによる、交流会用踊り練習



サンゴ礁シュノーケリング



機織り体験

## 【プログラム概要】

沖縄離島の「原風景」が残る集落散策（白保公民館指定文化財めぐり）／方言自己紹介・伝統芸能練習（交流会用）／サンゴ礁シュノーケリング／石垣島見学（マイクロバス）／機織り体験／ビーチクリーニングと漂着ゴミ講習／夕食交流会／日曜市見学／月桃加工施設作業体験／民泊稼業体験 など



一見、海と離れてみえるプログラムも少なくない印象があると思います。全て、海と陸上の暮らしぶりとの密接なつながり—白保住民がエコな農業やライフスタイルを築かないと、「魚湧く海」「命継ぎの海」の保全は難しいこと—を知るねらいがあります。サンゴ礁を健康な状態に保っていくためには、地域をあげての陸上のとりくみが不可欠であり、しかもその活動がボランティアではなく収益を伴うことが、住民参加を促進するために非常に大切です。よって有料のスタディツアーに参加することは、ささやかながら白保の持続的な地域づくりに貢献することにもつながるのです。

このスタディツアーのハイライトは、意識の高いNPO 理事クラスの家庭に1泊分宿し、稼業を体験するホームステイでしょう。体験者は、単に「自然」にふれるだけではなく、伝統的な生活文化の生きた体現者、すなわち自然に寄り添って生きる力を豊かに持つ人々と親しく触れ合えることこそ、自然と共生してきた文化が残る場所を訪問する最大の魅力であること—「人」が地域の最も尊い資源であること—に気付けるはずです。

そして、一度きりの旅ではなく、リピーターとして、「白保ファン」になって再訪してくれ、地域活動のサポーターになってくれるようなゲストを増やすこと、これがNPOのめざす「交流」なのです。私達はささやかながら白保サポーターの一員となるべく、継続的な参加に加えて、プログラム作りにも協力していきたいと思っています。



白保日曜市を見学、取材



稼業体験（野菜農家）



稼業体験（畜産 牛舎にて）

## 学習を終えて

### 「日常生活に活かせる尊い体験に」 1年 船見かなる

間違いなく大学生活のターニングポイントになるだろう充実した滞在でした。民泊先の美里家では農業の苦労を学びつつも、自分達で収穫した生りものを自ら料理して頂く暮らしの尊さや、地域の絆の豊かさを、楽しく実体験させて頂きました。どっさり頂いた野菜を、帰ってから自分で下手ながらも調理してみたり、部活動のマネージャーで（白保の方々のように）明るく笑顔でふるまうよう心がけたりと、白保のライフスタイルに触れたおかげで自分の生活・価値観が変わりました。白保のお祭りがある時に、またぜひ訪ねたいです。

白保のみなさん、フクラハユウ（＝有難うございました）。

### 「学生の皆さんと新たな村づくりの視点を探り合えるのも楽しみ」 宮良操さん（民泊先のお一人）

法政大学の学生達との出会いは、農業を営む我が家の家族にとっては家業の畜産業を通して石垣島や、白保集落、そして家族を知って頂く貴重な出会いです。畜産業の基本、仔牛生産、繁殖、肥育などの内容は勿論、島のその他の産業や地域の営み、文化や祭り、コミュニティや地域づくり全般を体得してもらいました。観光経済に沸く島社会の現実や課題、島の外から見える石垣島、島の中から見る石垣島、その課題に取り組む白保村の取り組みを、学生の皆さんと情報を共有し、互いの相違点の中から新たな村づくりへの視点を探り合えるのも楽しみのひとつです。

# 「津軽鉄道でむすぶまちづくり」

担当教員 西城戸誠 長峰登記夫

## コース概要

日程 2019年2月16日～2月22日

場所 青森県五所川原市、中泊町、つがる市

参加人数 13名

## コースのねらい

本フィールドスタディは、赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動をたどり、奥津軽地方の着地型観光の実践や地域づくり、まちづくりの現場を学ぶことです。「津軽鉄道でむすぶまちづくり」というコース名は、このフィールドスタディの実践によって、地域のまちづくりの実践をつなぎ合わせるという意味も込められています。つまり、本フィールドスタディは、訪問先から「学ぶ」という側面と、私たち自身が「地域にかかわる」ということがどういう意味を持つのかという点を再帰的に捉えることを企図しています。赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動や、コミュニティカフェの実践を学び、地域づくり、まちづくりの現場を学びます。

## 内容

1日目：五所川原駅近くのコミュニティカフェ「でる・そーれ」に集合し、「立佞武多の館」を訪問しました（なお、深夜バスで到着した参加者は、立佞武多の紙貼り体験をさせていただきました）。その後、「奥津軽基礎講座」と称して、まず立佞武多の館の菊地忠館長から立佞武多の復活の経緯と、現在の状況についてお話をいただきました。次に、でる・そーれの松野麗子さんから、でる・そーれ10年の歩みとご自身の関わりについてお話を伺い、松野さんやでるそーれのスタッフが、コミュニティカフェでるそーれとともに一緒に成長していく様子が理解できました。最後に、五所川原市の地域おこし協力隊の山下貴さんから、五所川原市の魅力について地域内外の視点から伺いました。講義の後は、グループに分かれて、農家民泊をし、地元ならではの食事とともに、地域の方といろいろな話をして、世代を超えた交流を行いました。

2日目：農家民泊先から集合し、昨晚の出来事のふりかえりを行いました。参加学生の感想に対する民泊先の方からコメントをいただきました。また、津軽鉄道サポーターズクラブの米山竜一さんから、クラ



農家民泊先の方と一緒に



新座敷にて太宰治の話を伺う



ストーブ列車の中でスルメを食べる



ウドファンディングを使った津軽鉄道の転車台復活プロジェクトの話をいただきました。また、津軽半島観光アテンダントの小枝美知子さんから、津軽鉄道におけるさまざまなイベントについてお話を伺いました。その後、津軽鉄道のストーブ列車に乗り、津軽五所川原駅から金木駅まで移動し、太宰治の生家である斜陽館や、新座敷、ぽっぽ屋を訪問し、太宰治を巡った観光の「質」の違いについて学びました。夜は、でる・そーれで「うちごはん」をいただき、現地の方との交流を深めました。

3日目：つがる市木造に移動し、フィルムコミッションの川嶋大史さんに、地元を舞台とした映画づくりについて話と、ご自身のこれまでの活動について伺いました。昼食は地元でカツ丼が有名な三浦食堂でとり、稲垣薫の会の方の指導のもと、わら細工の体験を行い、廃校になった小学校の跡地利用について見学しました。次に、中泊町の農家（イネ子の畑）に伺い、冬のアスパラガスの収穫体験と佐藤イネ子さんの地域活動や津軽鉄道応援直売会などの話を伺いました。そして、宿泊先の中泊町ふれあいセンターに移動し、これまでのフィールドスタディの内容の振り返りを行いました。夕食は、中泊町のグリーンツーリズム団体「かけはし」の方をお願いをし、学生たちも少しだけデザートづくりを手伝いました。夕食後は、参加学生は課題－外国人旅行客に対する「奥津軽の取扱説明書（トリセツ）」作成－に取り組みました。

4日目：「かけはし」の方が作ってくれた朝食を頂いた後、五所川原市にもどり、桑田ミサオさん（92歳）と一緒に、笹餅の制作体験をしました。桑田さんは75歳で起業し、地元や津軽鉄道の車内販売でも大人気の笹餅を作られています。本フィールドスタディ10回記念にふさわしいゲストでした。最後に、でる・そーれにおいて地元の方の前で課題の発表を行い、五所川原を後にしました。



冬のアスパラガス収穫（イネ子の畑）



桑田ミサオさんと笹餅づくり



でる・そーれでの発表会

## 学習を終えて

奥津軽 FS は、ほとんどが初体験でありとてもよい経験になりました。今回のテーマである「まちづくり」を様々な体験・見学・生声を通してより深く学ぶことができました。まちの名物であるリンゴ、立佞武多、津軽鉄道などを生かしたまちづくりの知恵や努力、そしてまちの歴史、偉大さを知りました。初日の夜、民宿に泊まりましたが、初めての体験で少し緊張しましたがとても歓迎してもらえました。普段味わうことの出来ない人の温かさを感じることができました。民泊の方々だけでなく、先生をはじめでるそーれの皆様、スタッフの皆様の温もりを感じることが出来る4日間でした。「もう一つの家」が出来た気がします。次、行った時「おかえり」といってもらえるそんな場所でした。「ただいま」と言いに行きたい気持ちになりました。（2年 橋本拓郎）

この奥津軽 FS はまちづくりがテーマではありますがこの他にも現地の様々な人に出会うこともテーマとなっていました。私がお会いした方の中でも特に立佞武多の館の菊池館長のお話が印象に残りました。今でこそ五所川原市は立佞武多のお祭りでは有名ですが以前は電線が通ったことにより立佞武多が縮小化されてしまうなどの苦難があったことを知りました。困難を乗り越え元の姿を取り戻した立佞武多は多くの観光客を呼び込み、衰退しかけていた商店街を救うなど大きな役割を果たしたのです。「ひとは町をつくるが、後には町が人をつくる」と最後に話されていましたが、一度できた町が続いていくには地元を愛する人がどれだけいるかが重要であるということが分かりました。（3年 三沢まどか）

# 「行政（警察・防衛関係）による生活と安全の確保」

担当教員 永野秀雄 長谷川直哉

## コース概要

日程 2019年2月28日、3月1日、3月5日、3月6日

場所 警視庁麹町警察署、警視庁本部・通信指令本部、警視庁交通管制センター、警察政策研究センター、警察大学校、警視庁警察学校、防衛省（市ヶ谷台）、防衛研究所、三宿駐屯地の防衛装備庁（先進技術推進センター）、朝霞駐屯地・りっくんランド

参加人数 14名

## コースのねらい

このコースのねらいは、国民の生活と安全を守る実力組織としての警察・防衛関係の組織と現場を見学して、その現状を学ぶことにあります。将来、警察官、自衛官を志望する学生や、この分野に関心のある学生に参加してもらいたいと考えました。

## 内容

第1日目の午前中は、法政大学を管轄区に含む警視庁麹町警察署を見学させていただきました。警視庁及び同署の果たす役割についての講義を受けた後、署内の見学、パトカー・白バイ装備の実演説明、装備資器材の活用体験などをさせていただきました。午後は、まず警視庁本部に移動し、同庁幹部の方から講義を受けたのち、110番通報を集中的に処理する通信指令本部を見学しました。その後、新橋の交通管制センターに移動し、都内の交通状況を巨大スクリーンを用いてコントロールしている様子を見学しました。

第2日目は、府中市にある警察政策研究センター、警察大学校及び警視庁警察学校を見学させていただきました。警視庁警察学校では、同日に行われていた武道大会も見学することができました。



警視庁麹町警察署



警視庁交通管制センター



第3日目は、大学の近くにありながら外からしか見たことのない防衛省で、市ヶ谷記念館（極東軍事裁判の法廷）、広報展示室及び防衛研究所を見学しました。また、午後から三宿駐屯地の防衛装備庁（推進技術推進センター）に移動し、防衛技術開発に関する講義を受け、防護マスクやロボット等の展示を見学しました。

第4日目は、朝霞駐屯地・りっくんランドにおいて、陸上自衛隊の方から装備等に関する説明と、戦車等の見学をすることができました。また、振武臺記念館において、旧陸軍予科士官学校にまつわる数々の展示品や旧軍関係の資料を見ることができました。



警視庁警察学校



防衛省（市ヶ谷台）



防衛研究所



朝霞駐屯地・りっくんランド

## 学習を終えて

「通信指令センター、交通管制センターでは大きな衝撃を受けた。両方の施設で活用されている巨大スクリーンは圧巻の一言であり、リアルタイムで情報が目まぐるしく更新されていく様子に感動すら覚えた。」（2年 大塚朱莉）

「防衛省では、女性の自衛官の方がとても素敵で印象に残っている。昔だったら少佐である位の方が女性で、しかも最終学歴が高校卒業とのことで、自分次第でキャリアアップができる環境だと分かった。また、とても丁寧で親切であり、普段関わることのない少し怖そうな自衛官のイメージが変わった。」（2年）



# 「オーストラリアフィールドスタディ： 英語と環境保護を学ぶ」

担当教員 高田雅之 ストックウェル・エスター

---

## コース概要

日程 2019年2月17日～3月3日

場所 オーストラリア、クイーンズランド州、ゴールドコースト

参加人数 23名

## コースのねらい

以下の3つの大きな研修目的があります。

- ① ボンド大学附属語学学校で英語を学ぶこと
  - ② 世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶこと
  - ③ オーストラリアの文化を学ぶこと
- 

## 内容

オーストラリア・フィールドスタディ（AFS）には3つの特徴があります。それは、①大学附属語学学校での語学研修、②オーストラリアの文化を学ぶ、③世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶ、この3つを統一的に学習・体験できることです。

語学の授業は、クイーンズランド州ゴールドコースト市内のボンド大学キャンパス内にある大学附属語学学校（Bond College）で行われました。Bond College 授業の開始初日に、Placement Test（英語力の判断をするためのテスト）が実施されました。このテストのスコアに基づき授業を受けるクラスレベルが指定されます。これは、「生徒の現在の能力にあうレベルで英語を学ぶことがその習得に役立つ」という考えからです。授業のプログラムは、学習の基礎となる項目である「聴く、話す、読む、書く」の能力向上を目指して総合的に進められました。

2週間の本フィールドスタディ中は、各学生が、日本人学生の受け入れ経験のあるオーストラリア人の家庭で過ごしました。オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことも貴重な経験となりました。

フィールドスタディではカランビン野生動物保護区とラミントン国立公園の2カ所を訪ねました。オーストラリアは世界でも最も豊かな自然環境をもち、かつ自然環境や動植物の保護に積極的な国のひとつですが、そこで自然環境や動植物の保護について勉強しました。

カランビン野生動物保護区にある野生動物病院や研究施設を訪問し、病院に来る動物と動物の治療を始めとし、自然環境の中で人間の行動によって動物に直接影響を与える危険性があるために環境を大切

にする必要性について学びました。それから、カランビン野生動物保護区が多くのネイティブ動物のリハビリにどのように重要な役割を果たすかについて学びました。コアラのエリアも訪れ、スタッフと話をしてコアラについてより多くの知識を身に付けました。

ラミントン国立公園は1994年にユネスコの世界遺産に登録された、 Gondwana 雨林保護区の一つの場所です。レミントン国立公園には、亜

熱帯、乾燥、温帯、寒帯の気候に属する植物が生息していて、太古の自然を思わせる景観が広がっています。亜熱帯地域のナンヨウスギ、寒帯地域にのみ見られるナンキョクブナ、また最古のシダ植物などの170種以上の希少な植物の他、クサビオヒメインコやアルバートココドリなどの絶滅危惧種を含む270種の鳥類、フクロギツネやパルマワラビー、ヒメウオンバットなどの珍しい動物を見ることが出来ます。本フィールドスタディでは、この貴重な自然をオーストラリアの政府がどのように保護しているか、どのように eco-tourism に結びつけているかなどを学びました。

こうしてAFSでは、英語学校で英語を学び、FSで自然環境や動植物の保護について勉強し、そこで学んだことについてホームステイ先の家族と話すなど、オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことができます。



オーストラリアの自然動物について学ぶ①



オーストラリアの自然動物について学ぶ②



2週間の Bond College の修了式後



きれいなオーストラリアの海

# 「過ぎ去ろうとしない過去」—歴史を現在にいか 活かすか？ ドイツ編

担当教員 辻 英史 西城戸誠

## コース概要

日程 2019年3月3日～15日

場所 ドイツ連邦共和国（ベルリン、ヴィッテンベルク、エアフルト、ヴァイマル、ミュンヘン）

参加人数 13名

## コースのねらい

現代のドイツ社会が、19世紀から現代までのドイツの歴史とどのように向き合ってきたのかを学びました。この時期のドイツでは、ナショナリズムの運動や国家統一、戦争や革命、ナチスによる支配と敵対者の迫害と虐殺（ホロコースト）、さらに東西ドイツの分断と再統一といった、激動の事件がありました。そうした過去の出来事がどのように記憶されているのか、歴史的に形成されてきた町並みや建造物を、観光や地域振興にどのように利用しているのか、各地でその実例に触れ、現地の人にインタビューをおこないました。

また、ミュンヘン大学日本語学科の学生たちとミュンヘンの街をまちあるきし、発見した事柄についてポスターを作って報告するワークショップを開催しました。

この問題をより深く理解するためには、日本の状況に関する知識が欠かせません。そのために、まず2018年夏に長崎でフィールドスタディをおこないました。長崎編と今回のドイツ編の両方に参加したメンバーもいます。日本とドイツの違いについても考えました。

## 内容

訪問したドイツの街は、過去の歴史の痕跡が至るところにありました。FSで訪問した、そのいくつかをパターンに分けて紹介します。

### ①記念碑（Denkmal）

いわゆるモニュメント。過去の英雄や時代を賛美するだけでなく、犠牲者を追悼するものもある。

（左）1871年のドイツ統一を記念する巨大なキュホイザー記念碑（テューリンゲン州）

（中）ベルリンのホロコースト記念碑——石棺か墓石を思わせる2711基のモニュメントが並んでいます。

（右）ミュンヘンの白バラ記念館——ナチスへの抵抗運動をおこなったミュンヘン大の学生たちが記念されています。





## ②「記念館・追悼施設」(Gedenkstätte)

遠ざかってしまう過去にアプローチするための手がかりとして、事件の起こった「現場」が保存され、学習の場となっています。



(左) ブーヘンヴァルト強制収容所記念館——ナチ時代の強制収容所のすぐ裏手に、戦後ソ連軍によって連行された大勢のドイツ人が亡くなった場所があります。

(右) 強制収容所の死体焼却炉を製造していた企業トップフ&ゼーネ社の本社ビルが「記憶の場」として保存されています(エアフルト市)。

## ③日常生活のなかに過去の歴史の痕跡をとどめる。

(左)「蹟きの石」——写真のようなプレートを、ナチスによって迫害された人が住んでいた家の前の路面に設置する取り組み。市民運動によって進められています。

(中) クレーマー橋(エアフルト市)——中世から続く、橋の上に建てられた商店街で、アーティストたちが暮らしながら創作活動をしています。保存協会会長のツヴァイクラーさんと 住民で芸術家のひとりゴブシュさんに話を聞きました。

## ④観る人の感覚に問いかける

(右)「対抗記念碑」——ベルリン・ユダヤ博物館の「落ち葉」。物言わぬ無名の迫害の犠牲者を象徴する金属でできた顔を、訪問者が足で踏むことで彼らに声をあげさせます。



## 学習を終えて

私は今回のフィールドスタディで歴史教育は重要なものだ痛感した。経済、文化、政治を期限なく持続できる社会、つまり持続可能な社会を築くためには過去を知り、社会を客観的な視点で見ることが不可欠であるからだ。かつて世界全体で起こってしまった戦争は差別、暴力を引き起こし、文化を壊し、経済を破綻させた。同じ過ちを繰り返さないために、ホロコーストや戦争、差別などの悲惨な過去が二度と起きることのないよう一人でも多く人が過去を知るために、過去について自主的に考える数多くの機会が必要である。(1年 森 裕香)

結論として、記念碑からの想起とは、犠牲者への敬意や偲ぶことだけではいけない。加害者を想起することが、歴史上の悲惨な出来事の反省となり、私たちを同じ過ちを繰り返さないよう、そして私たち自身に行動を促す手段となると言えるだろう。日本人として、日本の歴史についてもっと知るべきなのではないかと感じられた。今後の課題はドイツの歴史を学ぶだけでなく、日本人として日本の歴史を理解し、現在の想起の仕方を学ぶことになるだろう。(2年 矢尾優奈)